

◇◆慶應義塾大学大学院経営管理研究科（ビジネススクール）
「実践的授業方法について考える」ニュースレター（第11号・2007/11/30）◆◇

ニュースレターの第11号をお送りします。今月から3回にわたって、山形県鶴岡市にある東北公益文科大学大学院の石田英夫先生による実践的授業方法取組をお届けします。お届けする内容は、石田先生が福岡の中村学園大学在職中に主宰されていた「ケース・メソッド研究会」の様子です。

コンテンツ

本号のお知らせ
(イベント情報などをご案内します)

実践的授業法取組紹介
(実践教育に鋭意取り組まれている先生方の手記を掲載しています)

ショートエッセー
(実践的授業方法に関するエッセーを掲載しています)

□■□本号のお知らせ.....

先々月来ご案内している「ケースメソッド授業体験ワークショップ」につきまして一部企画内容を変更しましたが、開催の詳細が確定しましたのでご案内します。

会合名称: 文部科学省「特色ある大学教育プログラム」シンポジウム
『ケースメソッド授業とケース教材』

日程: 下記1)2)同じ内容で開催します。
1)2008年3月 3日(月) 9:00~17:00
2)2008年3月13日(木) 9:00~17:00

場所: 慶應義塾大学法科大学院ディスタンスラーニング室(三田キャンパス)

主催: 慶應義塾大学大学院経営管理研究科
日本ケースセンター(財団法人貿易研修センター内)

趣旨: ケースメソッド授業に触れる機会と、ケース教材を活用するための情報を提供する
1. より多くの大学教員にケースメソッド授業への理解を深めていただく
2. 経営教育以外での教育分野におけるケースメソッド授業実践情報を共有する

人数: 各回 100名

対象：高校・大学教員、および一般参加者

参加費：無料

（ただし教材実費および会合終了後の交流会費は徴収させていただきます）

応募方法：お申込は2008年1月8日から受付予定です。詳しくは来月のニュースレターでお伝えします。

詳しいご案内はこちら



http://www.kbs.keio.ac.jp/gp/gp_4_2.html

.....

慶應義塾大学ビジネススクールのホームページからニュースレターの
バックナンバーがご覧いただけます。

こちらからどうぞ。



http://www.kbs.keio.ac.jp/gp/gp_news.html

..... □ ■ □

□ ■ □ 実践的授業法取組紹介

実践的授業法取組紹介

このコーナーでは、大学教員による実践的授業方法への先存取組を「私の履歴書」風に紹介して参ります。今月から寄稿いただくのは、現在、山形県鶴岡市にある東北公益文科大学大学院で教鞭をとっている石田英夫先生です。今回から3回に渡ってお届けするのは、石田先生が福岡の中村学園大学在職中に主宰されていた「ケース・メソッド研究会」の運営に向けた取組記録です。

～ ケース・メソッド研究会の歩み ～

東北公益文科大学大学院
公益学研究科 教授
石田 英夫 先生

第1回 ケース・メソッド研究会が目指したもの

（次回以降の予定）

第2回 研究会メンバー格闘記

第3回 ケース・メソッドの普及を支え得るもの

世の中には普及しそうでいて、なかなか普及しないものがあります。その最たるもののひとつにケース・メソッド教育があると思います。

「わが国での」という前置きを置けば、ケース・メソッド教育のおそらく中心的存在である慶應大学ビジネス・スクールで、私は永い間、ケース・メソッドで社会人学生やビジネスパーソンを教えてきました。そんな経験を踏まえて声を大にして言いたいことは、慶應ビジネス・スクールが外部評価によるランキングでトップにランクされているのは、「ケース・メソッドで教えているからだ」ということです。

慶應ビジネス・スクールは創立以来、基礎科目のほとんどの授業が、ケース教材を用いて参加者が討議して学ぶスタイルで貫かれています。慶應ビジネス・スクールは、そうすることがごく自然に内外から期待され、半ば当然視されている経営大学院です。こういう学校にいてケース・メソッドで教え続けるには、もちろん積み重ねてきた条件があります。よその大学で教えている先生が何かのきっかけでケース・メソッドの魅力を知り、その学校で孤軍奮闘してケース・メソッドで教えるときに生じる苦労はありません。

よいものであっても普及しないということは、普及のための第一歩が踏み出せにくいとか、あるところから先には進みにくい壁があるなど、普及の過程に何らかの難しさがあるということです。その難しさがどのようなものなのか、皆目見当が付かないということではないものの、どのように乗り越えられるだろうかという期待の一心で始めたのが、これからご紹介していくケース・メソッド研究会でした。

この研究会は、私が2002年から勤務した中村学園大学で、慶應ビジネス・スクールでの元同僚で、私よりもひと足先に赴任していた古川公成君とともに始めたものです。古川君は中村学園大学の初代流通科学部長として、この大学にケース・メソッドによる討論授業ができる立派な階段教室を建築のときに作っていました。研究会の重要なハードウェアのひとつである教室は、こうして研究会メンバーより先に用意されていました。また、この教室には可動式の黒板システムも設置されており、討議参加者の発言を大量に書き留めて授業を進めるための大道具も完備されていました。

メンバー集めのほうは、私が会員である国際ビジネス研究学会九州支部の懇親会の席上で、私が腹案として持っていたケース・メソッド研究会に参加してくれる同志がいるだろうかという打診したことに始まります。私自身、福岡に来てほぼ1年経っていたので、そろそろ何かやりたかったのです。そうすると、ビジネス・スクールを開校したばかりの九州大学の星野教授、西南学院大学の藤岡教授、九州産業大学の井沢教授が「やりましょうよ。面白そうじゃない」と賛同してくれたのです。

それなら古川君が作ったあの教室でやろうということで、大学教員が3分の2と実務家が3分の1くらいのメンバー構成で、研究会が始まったわけです。ケース・メソッド研究会の活動の基本は、月に1回、メンバーが集まってケース・メソッド授業の実演を繰り返すというものです。

始めたころは他の人たちに「ケース・メソッド授業というのはこういうものですよ」というデモをするために、私と古川君がほとんど交互に先生役を担当しました。そのうちにだんだん、他の人が討議リードをするようになっていき、メンバーが自作したケースも登場するようになっていきます。このプロセスこそがこの研究会の最大の恵みなのだと思いますので、私の雑感も含めて、次回と次々回で少しずつご紹介していきます。

このような活動が4年にわたり、三十数回続いたところで出版したのが2冊の「ケース・ブック」です。この2冊は

言わば、研究会の成果報告書であり、ケース・メソッドの普及を目指した草の根活動が実を結ぶということがあるのですよ、という私たちからのメッセージでもあります。

※ 文中に出てくる「2冊のケース・ブック」とは、石田英夫、星野裕志、大久保隆弘編『ケース・ブック1 ケース・メソッド入門』『ケース・ブック2 挑戦する企業』（慶應義塾大学出版会 2007年2月）です。（竹内追記）

.....□■□

□■□実践的授業方法ショートエッセー.....

このコーナーでは、ケースメソッド教育をはじめとする実践的授業方法に関するショートエッセーを、毎月少しずつお届けしています。

第10回

百聞は一見に如かず

石田英夫先生は、慶應義塾大学ビジネス・スクールの開校期にハーバード・ビジネス・スクールからケースメソッド教育を導入し、その定着と進化を支えた中心人物のおひとりである。そんな石田先生が慶應義塾をご定年で退職された後、九州の地で興したのが「ケース・メソッド研究会」だ。筆者の知る限りではあるが、わが国でもっとも実践的、かつ、もっとも継続的にケースメソッド教育を再生産し続けているコミュニティである。

実践的授業方法の実現とその向上を目指す私たちは、この研究会から何を学ぶべきか。筆者の執筆パートではこの問いを携えつつ、今号から3回に渡って探求したい。

ケースメソッド教育とはどのようなものか。この問いに答えるのは意外と難しい。「ケース教材をもとに、参加者が相互に討議する、ディスカッション授業を中核とした一連の教育方法」という定義づけはできるが、その通りに口で説明しても、文章で説明しても、人にはなかなかうまく伝わらないのである。この授業方法が普及されにくい原因のひとつには、間違いなく「表現のしにくさによる、他者への伝えにくさ」がある。

加えて、ケースメソッドによるディスカッション授業は、“Participant Centered Learning”（この授業方法のもとでは教師が主役ではない）であるから、レクチャー授業と比べると、教師による授業へのコントロールが効きにくい。つまり、この授業を運営するにはディスカッションを通して学ばせることへの十分な理解とコツがいる。

授業の成り立ちや学習効果に関する説明が難しく、教壇に立つと制御も難しいという側面だけ見れば、少々厄介な授業方法と言えなくもないが、良質な授業体験が一度か二度できれば、この授業方法が魅力的だと感じる教師は少なくない。実践教育に関わる教師ならなおさらである。ここで考えたいことは、「良質な体験ができる場はどこにあるのか」「誰がそのような場を作れるのか」である。

石田先生は慶應義塾大学ビジネス・スクールでの長きに渡る教育経験から、ディスカッション授業がよい状態で実動しているときのイメージを豊かに持ち、それを再現する高いスキルを持っていた。動かしてみないと分か

りにくい事象を、その再現能力に長けた人が再現してみせて、他者に理解させた。百聞は一見に如かずである。

”Participant Centered Learning”という学習コンセプトに共感できる教師ならば、ディスカッション授業が実動している場にしばらく身を置くことで、「自分もこの授業方法で教えられようか」という好奇心が芽生えてくる。そして、好奇心はいつしか「このような授業をしたい」という願望に変わり、程なくして「この授業方法を自分のものにして、実践者を育成するのだ」という使命感に変わる。

石田先生が主宰した「ケース・メソッド研究会」に参加した大学教員や実務家は、おそらくこのようなプロセスに恵まれた。メンバーは研究会に参加しながら、自らの教育観が少しずつ変わっていく時間経過を堪能したに違いない。

ここで話は本筋からは少し反れるが、研究会の初期メンバーに実務家が加わっていたことの意義について、私見も含むが筆者なりに考察したい。

授業者が「教える」ことを第一義的に考えている限り、教師の関心事の中心は「教える内容」になる。研究会の目的が教える内容の吟味なのであれば、コミュニティは教員ばかりで構成されていたほうが好都合だろう。しかし、ディスカッション授業では教師が教えることよりも、授業参加者が自分たちで学ぶことのほうがより重要になる。そうすると、学習者として、主体的かつ自律的に学ぶ場を作っていくセンスやスキルも欠かせない。そのとき、コミュニティを挙げて同じ目標を追いかけ、相互に協働することに長けた実務家たちの存在が生きてくる。

このことから、「大人の学習者としての実務家の力を借りながら、教師たちが討議型の授業方法を習得するというのは、理にも適っており効果的である」ということを、石田先生の研究会は私たちに示唆していると思われる。

さて、最後に話を戻そう。「ケース・メソッド研究会」に参加したことで教育観が変わりつつあるとは言え、それで一足飛びにケースメソッドで上手く教えられるようになるわけではない。「石田先生や古川先生のようなベテラン先生の討議運営には実はなかなか近づけない」のであり、「見るのとやるのでは大違い」なのだ、実際に自分で討議運営をしてみると分かる。

そんな「大違い」が研究会メンバーのエッセイとなって、石田先生の著書『ケース・ブック1 ケース・メソッド入門』に収められている。次回はそこにも書かれなかった興味深い話も含めて紹介されることを期待しつつ、今月号をむすびたい。

（文章 竹内伸一）

.....□■□

このメールマガジンは毎月1回発信しております。

.....

○お問い合わせ先

慶應義塾大学大学院経営管理研究科

ケースメソッド授業法研究普及室（高木晴夫研究室内）

kbsnewsletter@info.keio.ac.jp

○慶應義塾大学大学院 経営管理研究科ウェブサイト

<http://www.kbs.keio.ac.jp/>

○慶應義塾大学大学院 経営管理研究科 文科省特色GP事業ウェブサイト

<http://www.kbs.keio.ac.jp/gp/index.html>

.....

発行者 高木晴夫

編集者 竹内伸一、住吉みどり

次号（第12号）は2007/12/27にお届けする予定です。

ご意見、ご感想、購読者のご紹介は kbsnewsletter@info.keio.ac.jp 宛に、また、メール送信先の変更を希望される方、購読を希望されない方、購読を中止したい方は、お手数ですが kbsnewsletter@info.keio.ac.jp までご一報ください。次号発信日の前日までのご連絡に対応させていただきます。

当メールマガジンの内容を転載する場合は、ご一報ください。